

別府大学における日中交流の一断面 —佐藤義詮と黄瀛の関係—

今井 航、山本 晴樹¹⁾、佐藤さくら²⁾

1) 別府大学名誉教授 2) 別府大学歴史文化総合研究センター非常勤職員

【要 旨】

佐藤義詮と黄瀛の交友は、24歳での出会いと78歳での再会という2度ではあったが、大学間を姉妹校提携させるほどの関係であった。最初の出会いは「詩」と「文化学院」を通じてであった。半世紀後の再会は1920年代末の両者の交友を抜きにしては語れない。1950年の別府女子大学の誕生から今までの中間地点において、「奇縁」と言われた両者の「特別な関係」が別府大学と四川外語学院との姉妹校提携へと実を結んだ。

【キーワード】

佐藤義詮 黄瀛 別府大学 四川外語学院 日中交流史

はじめに

別府大学創設者である佐藤義詮（1906～1987）は、日本と中国の2つの祖国を生きた黄瀛（詩人、四川外語学院教授、1906～2005）との交友があった。これは、別府大学の佐藤義詮記念館（新18号館）2階の大学史展示室において、窺い知ることができる。

2人は、佐藤義詮の母校である東京の文化学院では同窓であり、その後の波乱万丈の各生涯を経て50年ぶりに再会を果たした。その再会は、1980年代半ばに別府大学と四川外語学院（現在、四川外国語大学）を姉妹校提携に辿り着かせたと見られる。

本研究は、佐藤義詮と黄瀛の関係を解き明かし、別府大学における日中交流のもつ意義を考えようとするものである。

4年前の2016年、日中両国において時を同じくし黄瀛に関する研究成果が現された。佐藤竜一『宮沢賢治の詩友・黄瀛の生涯—日本と中国 二つの祖国を生きて』（コールサック社、2016年5月）では、それまで断片的に語られてきた黄瀛像がひとつにまとめあげられている⁽¹⁾。いっぽう、楊偉・唐先容『詩人黄瀛与日本現代主義詩歌研究』（西南師範大学出版社、2016年10月）では、黄瀛の交友関係や同時代的な黄瀛論などにも目配りがなされることで「ありのままの」黄瀛が掘り下げられている。しかしながら、佐藤義詮や別府大学との関係に触れられることはあっても、両者の関係を解き明かすまでには至らず、その意味を問えてはいない。

そこで、本研究では、まず両者の各年表を作成し、これらの比較・検討を行う。つぎに黄瀛に

関する研究の動向をまとめ、それを踏まえて両者の交友、とりわけ1920年代末時点での交友を考察する。さいごに四川外語学院との姉妹校提携に至るまでとその後を明らかにし、両者の関係を意義づける。

このため、日中両国における黄瀛に関する先行研究を調査・収集し、同時に別府大学附属図書館報である『アルゴノート』や『別府大学通信』あるいは『大分合同新聞』から両者の関係記事を抽出し、これらを整理し分析を行った。また、黄瀛の教え子である王敏氏へのインタビュー調査も実施した(2019年9月20日、法政大学九段校舎別館)。

佐藤義詮と黄瀛は、文化学院の同窓でもあることから、そこでの関係が明らかになってくれば、別府大学創設の原点を再確認・深化させてくれることにもなるであろう。また、四川外語学院との姉妹校提携を紐解くことは、別府大学における日中交流の一断面を明らかにすることになり、そのもつ意味を考えさせてくれるであろう。

ひいては、日中交流史研究上の学術的意義も見つけ出せるのではないだろうか。日中文化交流史／日中学术交流史の各研究に寄与する可能性のあることも否定できないと思う。

一 年表から見る両者の関係

年表から両者の関係を紐解くならば、彼らの生涯において2度の交友に着目できる。1930年頃と、1984年頃で、そのひらきは半世紀余に及ぶ。

佐藤義詮と黄瀛は、ともに1906年10月生まれである。黄瀛はその6日に中国四川省の重慶に生まれ、父は中国人、母は日本人のハーフであった。佐藤義詮は11日に大分県野津原町に生まれた。両者が会えるのは、1930年24歳の時と見られる。佐藤義詮「黄瀛氏のこと」『アルゴノート』(別府大学附属図書館報) No.14 (1984年) によれば「黄瀛とは同年である。彼を知ったのは戦前、彼が詩集「景星」を発行したところからである。その出版記念会が新宿の料理屋で開かれたのを覚えている」と懐古している。

しかし、かれらは、それ以前からお互いの名前を見知っていたはずである。まして同じ文化学院の出身者である。黄瀛の出版記念会に佐藤義詮が参加したのは、偶然ではなく文化学院時代の共通の知人を通じてであろう。

年表によれば、佐藤義詮が1925年4月に本科第2学年に入学している。黄瀛は翌年1926年に高村光太郎が保証人となって文化学院に入学している。しかも黄瀛は前年1925年に月刊『日本詩人』2月号に新詩人号の1位になり、草野心平が創設した『銅鑼』に寄稿している。詩人としては彼の方が有名であった。佐藤義詮も同年5月に詩集『空気の心臓』を出版している。黄瀛は入学した翌年には陸軍士官学校に入学したが、文化学院にはよく足をのばしていたらしい。両者は、1929年23歳の時、文芸雑誌『AVRIL』第2号、第3号に、ともに寄稿している⁽²⁾。同じ文芸雑誌に名前を連ねて知らないはずはない。そして1930年に両者は黄瀛の出版記念会で会えるのである。「詩」と「文化学院」が両者を繋げたと言えよう。

両者の交流は1年足らずで、翌年1931年に黄瀛は日本を離れ、南京で軍務に就く。

戦争が勃発し、佐藤義詮は、その後も黄瀛の消息を半世紀余り知らなかった。両者の再会は1984年78歳の時であった。さきの「黄瀛氏のこと」によれば「大学の代田教授が四川省の外語学院に招へいされた時黄瀛の消息を伝え聞いた。私は、黄瀛がおそらく蒋介石軍にはいっていたので生きていれば少将か中将ぐらいで台湾にでも亡命していたと思っていた。それが、解放軍に転換し文化革命中11年半に渡って抑留されていたという」とある。このとき黄瀛は四川外語学院の教授になっており、再度の交友が別府大学と四川外語学院の姉妹校提携を実現させたと思える。

1984年6月29日に黄瀛は別府大学を訪ねている。翌々年1986年3月5日にも四川外語学院の教職員をともなって別府大学を訪問している。すでに両者は80歳になっていた。翌年1987年3月30日に佐藤義詮は入院先の病院で逝去する。

年表を見ると、その交友は24歳での出会いと78歳での再会という2度だけと見られるものの、大学間を姉妹校提携させるほどの強い信頼関係が2人にはあったと思われる。若い時に詩人をめざし、晩年は熱心な教育者であったという点に両者の共通点を見つけ出せる。

なお、この年表は未完成であり、今後の資料収集によっては追加、変更、訂正されるものである。

黄瀛と佐藤義詮 各年表

黄瀛	出典	歳	西暦	年号	歳	佐藤 義詮	出典
10月6日 中国・四川省重慶に生まれる。	A		1906	明治	39	10月11日 大分県大分郡野津原村(現野津原町)に生まれる。	B
		1歳	1907		40	1歳	
		2歳	1908		41	2歳	豊州女学校開設(大分町於北町)
		3歳	1909		42	3歳	
		4歳	1910		43	4歳	
		5歳	1911		44	5歳	
		6歳	1912	大正	45/元	6歳	
		7歳	1913		2	7歳	
千葉県八日市場尋常高等小学校入学。	A	8歳	1914		3	8歳	
		9歳	1915		4	9歳	
		10歳	1916		5	10歳	
		11歳	1917		6	11歳	
		12歳	1918		7	12歳	
私立正則中学校入学。	A	13歳	1919		8	13歳	
		14歳	1920		9	14歳	4月 大分県立竹田中学校入学。
		15歳	1921		10	15歳	
		16歳	1922		11	16歳	
関東大震災時は、天津に帰省中。その後、青島日本中学校に編入。この頃、草野心平と文通をはじめる。	A	17歳	1923		12	17歳	4月 中央大学予科第一学年入学(16歳)
		18歳	1924		13	18歳	
月刊『日本詩人』2月号、新詩人号の1位。『銅鑼』に寄稿。『世界詩人』8月号に寄稿。黄瀛の下宿先に、帰国後の草野心平が1ヶ月住む。	A	19歳	1925		14	19歳	4月 文化学院大学部本科第二学年入学。 5月 詩集『空気の心臓』出版。
文化学院入学(高村光太郎が保証人)	A	20歳	1926	昭和	15/元	20歳	
文化学院を中退し、陸軍士官学校に入学。	A	21歳	1927		2	21歳	豊州女学校廃校、校地校舎・生徒を昭和女学院が継承。
		22歳	1928		3	22歳	3月 文化学院大学部本科卒業。英文詩集『White Nights(白夜)』出版。
春、岩手県花巻に宮沢賢治を訪ねる。7月 文芸雑誌『AVRIL』に詩『擬兒歌其他劉半農』を発表。	A 『AVRIL』 7月號	23歳	1929		4	23歳	7月 文芸雑誌『AVRIL』に「藝術價值其他」を発表。『AVRIL』7月號
中野にあった電信隊に配属され、軍用鳩の飼いを覚える。第1詩集『景星』(私家版100部)	A	24歳	1930		5	24歳	黄瀛が詩集『景星』を発行したところから彼を知った。出版記念会が新宿の料理屋で開かれた。『アルゴノート』No.14
日本を離れ、南京で軍務に就く。	A	25歳	1931		6	25歳	
		26歳	1932		7	26歳	
王爵霞と結婚。	A	27歳	1933		8	27歳	大分に帰る。『アルゴノート』No.14
第2詩集『踏枝』。上海で魯迅と会う。	A	28歳	1934		9	28歳	『L YRA GRAECA(古希臘歌謡考)』を出版。
『詩法』7月号を最後に、詩の発表を中断。	A	29歳	1935		10	29歳	『豊前豊後書誌』を出版。B
		30歳	1936		11	30歳	9月『希臘古代詩序説』を出版。10月昭和実践女学校の校主となる。B
日華事変か起こり、日本との関係を断つ。	A	31歳	1937		12	31歳	
		32歳	1938		13	32歳	4月 再び豊州女学校と校名変更。『別府大学学園90年史』年表
		33歳	1939		14	33歳	4月 豊州高等女学校に昇格。専門部を設ける。B
		34歳	1940		15	34歳	
		35歳	1941		16	35歳	
		36歳	1942		17	36歳	4月 財団法人豊州高等女学校の理事長に就任。B
		37歳	1943		18	37歳	
		38歳	1944		19	38歳	豊州高等女学校の校長に就任。B
南京で草野心平と再会。	A	39歳	1945		20	39歳	
		40歳	1946		21	40歳	5月15日 鶴見園にて別府女学校の開学式挙行。その直後に鶴見園は進駐軍により接収される。代替地の現在地(円通寺、現在の北石垣)へ移転。B
		41歳	1947		22	41歳	
		42歳	1948		23	42歳	4月 別府女学院が別府女子専門学校へ昇格。B

別府大学紀要 第61号 (2020年)

黄 瀛	出典	歳	西暦	年号	歳	佐藤 義詮	出典	
国民党の将校として、共産党軍により捕虜となる。裁判の結果、重労働が課せられ、獄に入れられる。	A	43歳	1949	昭和	24	43歳		
		44歳	1950		25	44歳	4月 別府女子専門学校は新制別府女子大学となり、初代学長に就任。	B
		45歳	1951		26	45歳		
		46歳	1952		27	46歳		
		47歳	1953		28	47歳		
		48歳	1954		29	48歳	別府女子大学は男女共学の別府大学となる。	B
		49歳	1955		30	49歳		
		50歳	1956		31	50歳	大分合同新聞文化賞を受賞。	B
		51歳	1957		32	51歳	4月 別府大学学長を辞任。	B
		52歳	1958		33	52歳		
出獄したが、収入が全くなかった。日本の友人たちが集い、援助する。友人たちと文通が開始。	A	53歳	1959	34	53歳			
		54歳	1960	35	54歳			
		55歳	1961	36	55歳	4月 再び別府大学学長となる。	B	
		56歳	1962	37	56歳	5月 藍綬褒章を受章。	B	
		57歳	1963	38	57歳	3月 財団法人大分県私立学校協会の理事長に就任。	B	
		58歳	1964	39	58歳	12月 大分県芸術文化振興会議の初代会長となる。	B	
		59歳	1965	40	59歳			
		60歳	1966	41	60歳	10月 別府大学開学20周年を祝う。	B	
		61歳	1967	42	61歳			
		62歳	1968	43	62歳			
文化大革命により、再び獄中の人となる。	A	63歳	1969	44	63歳			
		64歳	1970	45	64歳	3月『ピカソとその周辺』出版。	B	
		65歳	1971	46	65歳			
		66歳	1972	47	66歳			
		67歳	1973	48	67歳			
		68歳	1974	49	68歳			
		69歳	1975	50	69歳			
		70歳	1976	51	70歳	10月 別府大学開学30周年を祝う。	B	
		71歳	1977	52	71歳	7月 別府市内で自動車事故に遭う。以後長期間の入院生活。	B	
		72歳	1978	53	72歳			
開放政策のおかげで出獄。四川外語学院日本語を教える。四川外語学院に湘南高校の石川一成が赴任する。	A	73歳	1979	54	73歳			
		74歳	1980	55	74歳	11月 勲三等旭日中受賞を受賞。	B	
四川外語学院の教授 1月 王敏 宮城教育大学に留学。 6月 石川一成帰国。 『端枝』の復刻。	A	75歳	1981	56	75歳			
		76歳	1982	57	76歳			
代田昇教授が、四川外語学院に教授で行く。		77歳	1983	58	77歳	10月 香極字雑考『ある回想』喜寿記念出版。『空気の心臓』を復刻。	B	
6月1日 別府大学と姉妹校提携（公式書簡）。	『別府大学通信』第26号	78歳	1984	59	78歳	4月17日付けの「第二回通信」（黄瀛教授歓迎委員会事務局）書簡届く。	別府大学アーカイブセンター所蔵	
21日 岡田美都子や金窪キミが黄瀛を山の上ホテル訪ねる。22日 文化学院の仲間が30人くらい集まる。25日 東京・神田の山の上ホテルで黄瀛の歓迎会。草野心平や文化学院時代などの友人が100名以上集まる。『端枝』の復刻記念会も兼ねていた。黄瀛の来日は日中文化交流協会が招いた形となっていた。								
6月29日 別府大学訪問（森谷清を同伴して）。6月30日 別府白菊ホテルで「国東半島にて」の原稿用紙を佐藤義詮に渡す。（別府に1泊）（『讀書懐古 黄瀛氏のこと』より）。7月『端枝』の覆刻本と一緒に「詩人黄瀛」別冊が出版された。7月15日 帰国。	『讀書懐古 黄瀛氏のこと』『アルゴノート』No.14							
5月26～28日別府大学の友好派遣団が来院。団長は佐藤義詮、話し合い別府大学との協議事項が定まる。	『別府大学通信』第27号	79歳	1985	60	79歳	5月25日～31日、四川外語学院に友好派遣団、団長に佐藤義詮学長。26～28日まで3日間にわたって話し合い、四川外語学院との協議事項が定まる。	『別府大学通信』第27号	
2月 石川一成の墓参りのため来日。四川外語学院の教授一行とともに。	A	80歳	1986	61	80歳	3月5日 四川外語学院と交流を深める。黄瀛と会う。ホテル白菊で歓迎パーティが行われた。	『別府大学通信』第29号	
3月5日 四川外語学院は別府大学を訪問。黄瀛は顧問として参加。この時、黄瀛は四川外語学院日語科教授、中国日本文学研究会理事。6日、高崎山、マリンパレス、別府地獄巡りの観光をする。7日、大阪を経由して上海へ。	『別府大学通信』第29号							
		80歳	1987	62	80歳	9月 別府大学事務局の宇野世史也、四川外語学院に留学。11月 佐藤学園創立80周年を祝う。12月 佐藤学園理事長を辞任。	『アルゴノート』No.39 B	
		81歳	1988	63		3月 入院先の病院にて逝去。		
		82歳	1989	平成	64/元			
		83歳	1990		2			
広島テレビにより、ドキュメント番組が制作され、全国放送される。来日する。	A	84歳	1991	3				
		85歳	1992	4				
		86歳	1993	5				
		87歳	1994	6				
		88歳	1995	7				
		89歳	1996	8				

黄瀛	出典	歳	西暦	年号	歳	佐藤 義詮	出典
		90歳	1997		9		
		91歳	1998		10		
		92歳	1999		11		
千葉県銚子に「鏡子ニテ」の詩碑が建つ。		93歳	2000		12		
		94歳	2001		13		
		95歳	2002		14		
		96歳	2003		15		
		97歳	2004		16		
7月30日 重慶の病院にて逝去。 9月24日 四川外語学院に黄瀛詩碑の安置式が行われた。		98歳	2005		17		

※1 黄瀛については、主に佐藤竜一「黄瀛 その詩と数奇な生涯」(日本地域社会研究所、1994年)を参考にした。

※2 佐藤義詮については、主に別府大学の大学史展示室の年表を参考にした。

※3 表中の出典欄に見られるAは前掲※1の佐藤著、Bは大学史展示室の年表を指す。

二 先行研究から理解される両者の関係

ここからは、黄瀛に関するこれまでの研究を整理し、それを踏まえて黄瀛と佐藤義詮との交友について言及してみたい。

1 黄瀛に関する研究の動向

中国人を父として、日本人を母として生まれた黄瀛は戦前の日本において新進気鋭の詩人として知られていたが、戦後の中華人民共和国の成立、その後の文化大革命の時代に消息不明となり、いわば「忘れられた詩人」となった。しかし、文化大革命が終息した1970年代末に、黄瀛が故郷重慶の四川外語学院で日本文学の教員となると、その教え子である王敏(法政大学教授)が、黄瀛の業績を日本に紹介することによって、黄瀛はまた知られるようになった。「甦った詩人」といえるかもしれない。その一端は別府大学の鈴木晶が翻訳した王敏の論文「日本へ留学の意義—国境をこえた近代教育実践者の黄瀛母子—」『別府大学紀要』第58号(2017年)によってうかがわれる⁽³⁾。

王敏の努力により、黄瀛の名前は復活したのであるが、なかでも佐藤竜一『宮沢賢治の詩友・黄瀛の生涯—日本と中国 二つの祖国を生きて』(コールサック社、2016年)が果たした功績は大きい。佐藤はそれまで断片的に語られてきた黄瀛像をひとつにまとめあげた。佐藤は黄瀛との数回にわたるインタビューも踏まえて著述しているので、黄瀛の数奇な生涯を明らかにしてくれている。ただし、さすがに中華人民共和国成立期の時代や文化大革命の時代については、黄瀛本人も語りたがらなかったために、これらの時代の彼の生きざまについては詳しく書かれてはいない。今後の、とりわけ中国人研究者の仕事に託されることになろう。

佐藤のこの著作によって、黄瀛の名前は広く知られるようになったと思われるが、その後、彼の業績や生涯に関する新しい視角からの研究もでてきている。その一つが岡村民夫「詩人黄瀛の再評価:日本語文学のために」『言語と文化』(法政大学言語・文化センター)第16巻(2019年1月)である。岡村はすでに同誌第6巻で「詩人黄瀛の光栄—書簡性と多言語性—」と題する論文を書いており、その中で黄瀛が書く詩は、誰かに宛てて書く書簡と類似した側面もっていること、また黄瀛の出自とも関係して複数の言語が駆使されていることに注目していた。

岡村は、中国人の父と日本人の母をもつ黄瀛の詩の中に「越境と混血」という要素があり、このことが彼の詩の特色となっていることを指摘し、またこれが現在の国際化する日本語の将来を考える際に、ひとつの「日本語文学」の在り方を提示しているとして黄瀛を再評価している。「日本語文学」という新しいジャンルの先駆的作品として岡村は黄瀛の詩を位置付けているわけである。今後この視点からの黄瀛の詩の読み直しが試みられていくのではなかろうか。

それから、黄瀛の生涯あるいは個人史の研究に関しても、あらたな動きがでてきている。若手

研究者の劉黎による論文「国民革命軍将校・詩人黄瀛と陸軍士官学校」『愛知論叢』（愛知大学大学院協議会）第107号（2019年7月）がそれである。従来、黄瀛は1925年3月に青島中学校を卒業したのち上京し翌年、御茶ノ水にあった私立のユニークな学園である文化学院に入学したが1年後に中退し、母親の勧めもあって1927年10月に陸軍士官学校へ進学し、1929年7月に卒業したとされてきた。しかし、劉黎は文化学院の卒業生名簿を確認したところ、黄瀛は中退ではなく1929年3月に卒業していたことをつきとめている。すなわち、黄瀛は文化学院・陸軍士官学校の二重の学籍になっていたわけである。これは大きな発見といわなければならない。今後あらためて文化学院時代の黄瀛が見直されることになるだろう。

劉黎はまた前掲論文で、黄瀛が陸軍士官学校時代も詩作活動を活発に行っていたことを明らかにしている。黄瀛は陸軍士官学校在学中に30編あまりの作品を発表したという。それらの作品の細目は表の形で示されている⁽⁴⁾。劉黎はこれらの詩には、当時の時代状況を反映して、黄瀛の詩の本来の叙情性が薄まり、現実性が強くなり、ナショナリズム的な傾向が強まっていることを指摘している。そして前述の岡村論文とも呼応する黄瀛の詩の「越境性と文化の多様性」をもまた指摘している。これまで、黄瀛の陸軍士官学校時代の詳細については触れられることが少なかったため、劉黎の研究の功績は大きいといえよう。

2 1920年代末の両者の交友

これまで見てきたように、2019年以降、黄瀛研究は新たな段階に入っている。それでは、このような研究成果を踏まえて、佐藤義詮と黄瀛との交友は其中でどのように位置付けられるのであろうか。

黄瀛が半世紀ぶりに来日する1984年6月以降の佐藤義詮との交友については次章で触れられるので、ここでは1920年代末の時点での、2人の交友について述べることにしたい。両者の交友を示す史資料はきわめて限られている。佐藤義詮は「黄瀛のこと」『アルゴノート』（別府大学附属図書館報）No.14（1984年）に次のように書いている。

黄瀛は私の同年である。彼を知ったのは戦前、彼が詩集「景星」を発刊した頃からである。その出版記念会が新宿の料理屋で開かれたのを憶えている。

今年何十年ぶりかで日本にやって来たが、その時「瑞枝」を昭和9年に出版していることを知った。そして翌10年日本を離れて中国に帰ったという。私は昭和8年に郷里に帰った。

この文章からすれば佐藤義詮は黄瀛と交友を始めるのは「景星」の発刊の頃からと書いているので、1930（昭和5）年5月頃からになる⁽⁵⁾。しかし、佐藤竜一の前掲書によれば、黄瀛が日本を離れるのは1935（昭和10）年ではなく、1931（昭和6）年初頭となっているから⁽⁶⁾、わずか1年足らずの交友ということになる。これは佐藤義詮の記憶違いではなかろうか。

佐藤義詮は1930年以前に黄瀛と交友を始めたものと思われる。佐藤義詮は文化学院本科の第1回生（1925年入学）であり、黄瀛は第2回生（1926年入学）である。前掲の劉黎論文によれば⁽⁷⁾、陸軍士官学校では授業時間以外に他学校に通うことは許されていたので、黄瀛は士官学校在学中も文化学院に通っていた可能性が高い。そうすると、佐藤義詮と黄瀛は1926年以来、文化学院で1年間だけではなく、少なくとも佐藤義詮が卒業する1928年3月までの2年間は共に同学院で学んでいたことになる。さらに、佐藤義詮と同期の、のちに別府大学教授となる中込純次によれば⁽⁸⁾、かれらは「文化学院研究会」を結成し、卒業後も1年間学院の中で文化活動をつづけたので、翌1929年3月まで学院に通ったことになる。

草創期の文化学院は西村伊作のいわば文化サロンから発展したようなところがあったから、教員と学生とは家族のように付き合い、その交流は生涯つづいた。佐藤義詮と文化学院の同窓生との交流をみても、その傾向が強い。したがって、佐藤義詮と黄瀛との交友も恐らく同様なものであっただろう。残念ながら、直接この交友を物語るものは残されていないが、同時期出版された同人誌からその一端を伺うことができる。

前述の中込は、次のように述べている⁽⁹⁾。

それから、翌年（1929年一筆者（山本）注）の四月私が渡仏する前後に、私たちは二つの雑誌を創刊した。一つは AVRIL という大型の雑誌で、（中略）。表紙は（西脇一筆者（山本）注）マジョリ、カットはコクトーその他である。

この『AVRIL』は現在大分県立図書館に1～3号が所蔵されているが⁽¹⁰⁾、黄瀛はこの2号（1929年6月）と3号（同年7月）に訳詩を⁽¹¹⁾、佐藤義詮は創刊号（1929年5月）から論説を寄稿している⁽¹²⁾。



『AVRIL』創刊号



『AVRIL』第2号



『AVRIL』第3号

これで見ると、佐藤義詮と黄瀛は同人誌『AVRIL』の同人である。両者のあいだに全くの交流がなかったとは考えにくい。黄瀛は詩誌『銅鑼』の創刊号（1925年）からの同人であり、その中には生涯の友である草野心平がいたし、東北の花巻まで会いに行った宮沢賢治もいて、かれらは濃密に交流していた。したがって佐藤義詮と黄瀛との間にも同人として同様な交流があったものと思われる。

実は、佐藤義詮は1925年に詩集『空気の心臓』を東京堂書店から出版しており、詩人としての自覚があったし、1928年には西脇マジョリ（画家、文化学院の英語教師、西脇順三郎夫人）による挿画をもつ英詩集『White Nights（白夜）』を発刊しているので、当時注目を集めていた詩人である黄瀛とは詩を通じた交流もあったものと思われる。

この当時の両者の交友を直接的に示すものはないので断定はできないが、しかしこの交友なしには次章で触れられる半世紀後の再会と交友の復活は考えられない。やはり1920年代末の両者の親密な交友は確かに存在したものと思われる。

以上、黄瀛に関する研究の動向と、その黄瀛と佐藤義詮との交友（とりわけ1920年代末）を述べてきたが、後者に関してはあらたな史資料の発掘が必要と思われる。今後の研究の進展を待ちたい。

三 四川外語学院との姉妹校提携に見る両者の関係

別府大学では、かつて別府大学広報委員会の編集により『別府大學通信』が発行されていた。その第26号(1984年10月15日)1面には「広がる海外との学術交流」と見え、記事には「昨年のハワイ大学との姉妹校提携に続いて中国四川外語学院と姉妹校提携が実現した」とある⁽¹³⁾。別府大学『学生生活2019年度』にも、1983年7月にハワイ大学と、翌1984年6月に四川外語学院と、各姉妹校提携が結ばれたことが明記されている⁽¹⁴⁾。これらの提携は、別府大学における国際交流の先駆けに位置づけられると見られる。

ここでは、四川外語学院との姉妹校提携に注目し、提携に至るまでと提携のその後を可能なかぎりて明らかにし、佐藤義詮と黄瀛の関係がもつ意味を考察する。

1 3度にわたる両者の往来

『別府大學通信』には、四川外語学院との姉妹校提携に関する記事も散見され、さらには別府大学附属図書館より発行されてきた『アルゴノート』にも、関係記事が寄せられている。下表は、こうした記事を一覧にしたものである⁽¹⁵⁾。

表 四川外語学院との姉妹校提携に関する記事一覧

	著者	題目	掲載紙・誌	発行年月
1	佐藤 義詮	黄瀛	大分合同新聞	1984年 7月23日
2	—	四川外語学院と姉妹校	別府大學通信 第26号	1984年10月15日
3	佐藤 義詮	黄瀛氏のこと	アルゴノート No.14	1984年11月 1日
4	—	四川外語学院に友好派遣団	別府大學通信 第27号	1985年 4月10日
5	—	佐藤学長ら四川外語学院を訪問	別府大學通信 第28号	1985年10月15日
6	佐藤 義詮	四川外語学院を訪ねる	別府大學通信 第28号	1985年10月15日
7	佐藤 允昭	重慶に四川外語学院を訪ねて	アルゴノート No.17	1985年11月 1日
8	佐藤 義詮	中国行	大分合同新聞	1985年11月 4日
9	—	四川外語学院と交流深める	別府大學通信 第29号	1986年 4月10日
10	宇野世史也	別府大学の姉妹校〔3〕四川外語学院	アルゴノート No.39	1991年秋

注：筆者（今井）作成

これらの記事から確認されることは、大きく3点にまとめられる。

- ・1984年6月1日に姉妹校提携が実現し、同月6月29日に黄瀛が別府大学を訪問した。
- ・1985年5月24～31日に佐藤義詮ら一行4名が訪中し、四川外語学院を訪問した。
- ・1986年3月5日に四川外語学院の群一学院長ら一行5名が別府大学を訪問した。

1984～86年の3年間に、四川から別府へ、別府から四川へ、四川から別府へと3度にわたる両者の往来のあったことがわかる。ここからは、時系列に沿って少し詳しく見ていこう。

2 姉妹校提携に至るまで—「奇縁」を紐解く—

①経緯に関する2つの可能性

姉妹校提携が結ばれたとされる1984年の表中2には、以下のような記事が見られる。

中国四川外語学院と本学との姉妹校提携は、5月に本学から四川外語学院へ佐藤義詮学長名で、提携への文書が送られたが、これに対し6月1日付けで承知する旨の返書が四川外語学院学長群一氏名で届いた。これで姉妹校提携が実現したことになる。

同学院の黄瀛教授が6月29日来学佐藤学長と旧友を温め姉妹校の喜びをわかち合った。

(中略)。佐藤学長とは文化学院と同窓で旧知の間柄だったが、この4月短大部の代田昇教授が外語学院に講義に行った際、佐藤学長のことが分り、今度の来学と姉妹校の話が持ち上がった。

姉妹校提携に至るまでには、その2か月前の4月に別府大学短期大学部の代田昇が四川外語学院において黄瀛に会い、その際、佐藤義詮のことが話題となり、これがきっかけとなって、その1か月後の5月に別府大学から四川外語学院へ提携の文書が送られていたことがわかる⁽¹⁶⁾。翌月6月1日付けで承知する旨の返書が届けられたことで、姉妹校提携が実現したとされる。

2年後の1986年9月から1年余り四川外語学院に留学していた別府大学事務局の宇野世史也は、表中10で次のように記している。

1981年1月、四川外語学院日本語系の教師王敏が、国費留学生として日本政府から招かれた。事前に文部省に提出していた研究テーマが「宮沢賢治」だったことから、受け入れ先は仙台の宮城教育大学に決まった。この東北の地で彼女は一人の児童文学者と出会う。本学でもお馴染みの代田先生である。この出会いが一つの縁を芽生えさせていくこととなる。2年間の留学生生活を終え、帰国した王敏は、その翌年に代田先生を客員教授として四川外語学院に招聘した。代田先生の訪中で、本学の創立者佐藤義詮元学長と四川外語学院日本語系の黄瀛教授との友情が再燃することになった。二人は昭和初期、文化学院で同級生だったのである。(中略)。このような経緯と佐藤元学長のご尽力により、1984年6月、本学と四川外語学院の姉妹校締結が実現した。

児童文学者でもあった代田昇は、宮城教育大学において非常勤講師をしていた⁽¹⁷⁾。四川外語学院で黄瀛の教え子であった王敏は、1981年1月に国費留学生として日本政府から招かれ、受け入れ先の宮城教育大学において代田の集中講義をうけたことがある⁽¹⁸⁾。

王敏は、代田との雑談で彼に黄瀛の話をしたことがあると話している。また、2年間の日本留学を終えて帰国した後、自ら紹介状を書き、「中国に行きたい」と言う代田を四川外語学院に招いたと言う。別府大学短期大学部の代田は、こうして王敏から耳にしていた黄瀛に四川外語学院で出会うことになった。さらに、このとき黄瀛と話をするなかで、学長の佐藤義詮と黄瀛の関係を初めて知ることとなる⁽¹⁹⁾。さきの表中2の記事からすれば、それは姉妹校提携が実現する2か月前の4月のことであつたと思われる。

ところが、その実現の翌年1985年の表中6に、佐藤義詮は次のように書き残している。

一昨年のごことであった。短期大学部の代田昇教授が例年のとおり中国の四川外語学院に教授で行くことになって、四川の学院に私の旧友黄瀛さんがおることを知らせてくれた。

(中略)。

そのことが奇縁になって外語学院と別府大学は姉妹校として友好関係を結ぶことになり、59年の1月1日付けで外語学院から協定文が送ってこられた。

続いて黄さんが来日し、6月29日から30日にかけて本学に来られた。

「一昨年のものであった」とある。ここからは、代田が黄瀛に出会い佐藤義詮と黄瀛の関係を初めて知ることになったのは、1983年のことと思われる。それは、姉妹校提携実現の1984年ではなく、その前年である。さきの宇野は「2年間の留学生生活を終え、帰国した王敏は、その翌年に代田先生を四川外語学院に招いた」と記している。この「翌年」も文脈からは1983年と読めなくもない。いっぽうで、「59年1月1日付けで外語学院から協定文が送ってこられた」ともある。この「59年」は昭和59年で1984年のことであろう。

ならば、さきの表中2の記事に重ねてみると、1983年には代田が四川外語学院において黄瀛に会い、その際、佐藤義詮のことが話題となり、これがきっかけとなって、翌年1984年1月1日付けで四川外語学院から協定文が送ってこられ、同年5月に別府大学から四川外語学院へ提携の文書が送られ、翌月6月1日付けで承知する旨の返書が届けられたと見直される。

さきの王敏は、自身の日本留学帰国後まもなく代田を招いたと話している。また、王敏自身が佐藤義詮と黄瀛の関係を初めて知ることになったのは、やはり代田が黄瀛を訪ねた時だったと述懐している。さらに、その後、黄瀛が「義詮先生をお呼びしたい。姉妹校をやりたい」と言っていたこと、あるいは日本へ戻った後の代田からの王敏あての手紙で学長の佐藤義詮が黄瀛に会いたいと言っていることが伝えられ、代理でその旨の手紙を黄瀛に出したこと等も述懐している⁽²⁰⁾。

代田や王敏が知るはずもなかった両者の関係を初めて知ることになった経緯を見るにつけ、このような偶然があるのかとの思いを強くする。王敏は、代田が最初に中国に行った時は、それが佐藤義詮に依頼されたものではなかったとも話している⁽²¹⁾。佐藤義詮の言う、まさに「奇縁」が姉妹校提携実現へと導いたとしか言いようのない偶然であろうか。

さきの表中2の記事には、その実現2か月前の「4月短大部の代田昇教授が外語学院に講義に行った際、佐藤学長のことが分り、今度の来学と姉妹校の話が持ち上がった」とあった。だが、その前年1983年には、すでに偶然にも「佐藤学長のことが分り」「姉妹校の話が持ち上がって」と考えられるのである。

②50数年ぶりの再会

「黄さんが来日し」とあるように、姉妹校提携実現の6月、黄瀛は別府大学を訪問した。佐藤義詮は表中1で次のように記している。

黄瀛がはるばる重慶からやって来た。

(中略)。

本学にみえたのは、別府大学と四川省の外語学院との姉妹校提携を結ぶためであり、その端緒は短大の代田昇先生が四川省の外語学院に招へいされたことからである。

私とは50数年ぶりの再会であったが、私と同年なのにずっと元気そうに見えた。

代田さんが重慶に行き帰るとき「独居亦愉し」という詩を黄瀛から預かって来た。

また、表中3では次のようにも記されている。



来学した黄教授

左：佐藤義詮、右：黄瀛

大学の代田教授が四川省の外語学院に招へいされた時黄瀛の消息を伝え聞いた。
(中略)。

代田教授は四川から帰ってからの手紙で黄瀛が書いた「清狂不阿」の額やステッキなどを彼からとって私によこした。

また、その同封の手紙に次の様なものがある。

日本へ戻ってきた代田から、彼が黄瀛から預かってきた黄瀛が書いた「清狂不阿」の額・ステッキ・同封の手紙を、佐藤義詮が受け取っていたことがわかる⁽²²⁾。同封の手紙には「独居亦愉し」という詩があった。

前頁の写真は、50数年ぶりの再会を果たした両者である⁽²³⁾。また、佐藤義詮が学長室に掛けていた詩「國東半島にて」には、「黄瀛 1984年6月30日別府白菊ホテル」とある⁽²⁴⁾。

3 姉妹校提携のその後

①「四川外語学院友好協定派遣団」

1985年の表中4には、以下のような記事が見られる。

59年、本学と姉妹校になった中国四川外語学院（学長群一氏）からこのほど姉妹校提携を記念した友好派遣団招待の申し入れがあった。

本学では、これにこたえ5月25日から31日まで1週間の日程で派遣団を送る。団長は佐藤義詮学長で秘書長に野中卓短期大学部長。そのほか短期大学部代田昇教授、佐藤允昭図書館事務長といったメンバー。

このとき派遣団のメンバーとなった佐藤允昭は、表中7で「四川外語学院友好協定派遣団」の一員として、本年5月24日から31日までの8日間、上海・重慶・北京の3都市を訪問した」と記している。

また、表中5には「5月24日から31日まで佐藤義詮学長を団長に野中卓短期大学部長（秘書長）、代田昇短大部教授、佐藤允昭文学部講師ら4人が訪中、四川外語学院と提携の具体策について協議、交流をますます深くした」とあり、続けて「26日から28日まで3日間にわたって友好のなかにも慎重に話し合った結果、次のように決定事項、協議事項が定まった」とされ、各事項2点ずつが明記されている⁽²⁵⁾。

団長であった佐藤義詮は、表中6に次のように書き残している。

一応、日本の交通公社で旅行日程を組んでもらい、その経費も支払って出かけたのであるが、私が行くので大学から代田教授、短大の野中部長、それに図書館の佐藤允昭が同行することにした。

また、表中8には次のようにも記されている。

四川省では四川料理をごちそうになり、上海からの飛行機・宿舎・中国についてからの自動車などみんな無料で、通訳も日本の大学を出た人が2人ついてくれた。もっとも、私たちが行く前、全部日本の交通公社に手配してもらって、料金も払い込み済みであったのを、大学が全部キャンセルしてくれたらしい。

この行き違いは旅行中一緒に行ったN先生にいろいろ迷惑をかけたらしいが、私は四川の大学の黄教授の配慮だと思っている。

派遣団の移動・宿泊・食事などは全て無料で、払い込み済みであった料金もキャンセルされていたことがわかる。日本の大学を出た通訳も手配されていた。佐藤義詮は、これらを黄瀛の「配慮だ」と思っていた。

その通訳の1人は、さきの王敏である。王敏は、上海での出迎えから北京での見送りまで、ずっと付き添っていたと話している。彼女は、病気で歩くのも大変ななか「ただただ黄瀛に会いたいから来た」と話す佐藤義詮の姿から「命を縮めてでも」訪中されていると察し、両者の関係を特別であると述懐し、いまでも心に刻んでいる⁽²⁶⁾。

写真は、長江大橋のたもとにならぶ両者である⁽²⁷⁾。



〔黄瀛先生と学長，長江大橋のたもとにて〕

左：佐藤義詮、右：黄瀛

②群一学院長ら代表団5名の別府大学訪問

翌年1986年3月5日、四川外語学院の群一学院長ら一行5名が、前年5月の決定事項に基づき、別府大学を訪問した。1986年の表中9には、以下のような記事が見られる。

5日空路大分入りした一行は午後4時から本学で行われた歓迎式に参加した。本学では小松幹常任理事、西村駿一短期大学部学長、賀川光夫教授、工藤茂文学部長、野中卓短期大学部長、二宮淳一郎アジア歴史文化研究所長らが列席した。

小松常任理事から「両校がよい友好を末永く続けますよう」と歓迎のあいさつがあり、これに群一四川外語学院院長から「別府大学でよく学びたい」とこたえたあいさつと団員の紹介があった。このあと西村企画理事から学園紹介があり、続いて中国側からも同様な紹介があった。

続いて協議事項に基づいて本学から出版物やタイプライター、電卓などが贈られ、花束贈呈で両学校間のつながりをあたたかにした。

午後6時からホテル白菊で歓迎パーティが行われ「熱烈歓迎」の実をあげた。一行はまた本学の案内で、高崎山やマリーンパレス、地獄巡りなど別府の観光を楽しみ、7日大阪を経由して空路上海へ帰った。

訪日代表団は、群一団長に両校姉妹校の橋渡しをつとめた黄瀛教授をふくめ5人である。

団長 群一四川外語学院院長、

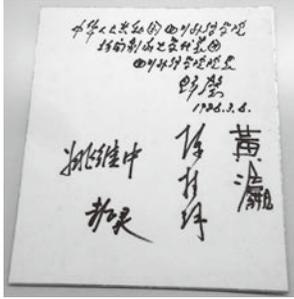
顧問 黄瀛同院日語科教授、中国日本文学研究会理事

団員 陳桂鈞 同日語科主任教授

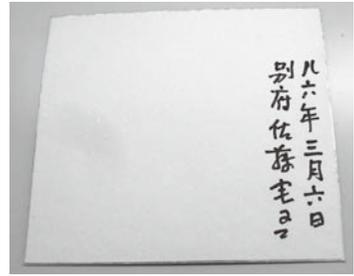
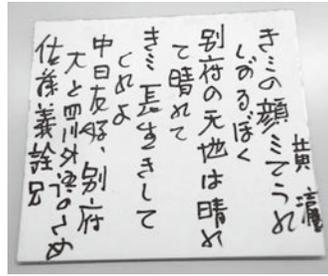
彭正祿 四川省高等教育局 公室主任

姚継中 四川外語学院日語科主任助理

一行5名は、佐藤義詮の自宅も訪ねたようである。次頁の各色紙は、その時のものと見られ、1986年3月6日の日付が見られる。



群一学院長ら一行5名
(佐藤允昭氏提供)



黄瀛 (左：おもて、右：うら) (佐藤允昭氏提供)

また、以下の写真にも3月6日の日付が見られる。



後列中央の黄瀛から時計回りに佐藤義詮夫妻、群一学院長
(佐藤允昭氏提供)

佐藤義詮は、この1年後、1987年3月30日に逝去した。

さきの宇野は、表中10で次のようにも記している。

私が初めて四川外語学院の門をくぐったのは1986年9月、空はどんよりとした雲に覆われ、蒸し暑い日だった。それから1年余りを彼の地で過ごした。

群一学院長ら一行5名が別府大学を訪問してから6か月後、宇野が四川外語学院に留学したことがわかる。彼の留学中に佐藤義詮が亡くなった。この訃報を黄瀛に伝えたのは、宇野であった⁽²⁸⁾。

また、宇野は、表中10で「現在、本学で中国語を講義されている群英先生も、かつてこの建物で学ばれた」とも記している。群英は、群一学院長の娘である。

四川から別府へ、別府から四川へ、四川から別府へと3度にわたる両者の往来は、宇野の留学や群英の講師派遣へと展開していた。黄瀛の教え子の王敏もまた、別府大学において「謝々！宮沢賢治」(2004年7月24日)、「黄瀛、宮沢賢治、草野心平 三者にかかわる話」(2017年7月22日)、「佐藤義詮氏の友人黄瀛先生の人柄と学問」(2017年12月16日)などの講演を行っている。

おわりに

両者の交友は、24歳での出会いと、78歳での再会という2度ではあったが、大学間を姉妹校

提携させるほどの関係であった。最初の出会いは「詩」と「文化学院」を通じてであった。その半世紀後の再会は、1920年代末の両者の、その交友の存在なしには語れない⁽²⁹⁾。

黄瀛の教え子の王敏は、両者の関係を「人と人との関係ですよ」「特別な関係ですよ」と繰り返した⁽³⁰⁾。佐藤義詮は、さきの表中6では「中国の四川外語学院から黄さんをはじめ総勢5名程が本学に来たいと言ってきている」とも語り「大学充実はこうして着々と私の夢を実現しつつある」と書き残している。

筆者は「2020年となれば「大学への出発」を果たした別府女子大学の誕生から70年の節目を迎えることとなる。本学は、およそ70年をかけてようやく「大学としての出発」を果たそうとしているのではないか」と書いたことがある⁽³¹⁾。

別府大学は、70年前の1950年に「大学への出発」を果たしてから中間地点となる35年目あたりで佐藤義詮のひとつひとつの「夢」が実現していき、そこからまた35年の時を経てようやく「大学としての出発」を果たそうとしていると見える。

この中間地点にあたるそのとき、「奇縁」と言われた両者の「特別な関係」が別府大学と黄瀛のいる四川外語学院との姉妹校提携へと実を結んだのである。

注

- (1) 1994年に日本地域社会研究所から出版された佐藤竜一『黄瀛—その詩と数奇な生涯』の新版である。
- (2) 吉岡義信「雑誌『AVRIL』』『アルゴノート』（別府大学附属図書館報）No.52、2018年。
- (3) 翻訳された原文は、王敏が編纂した『詩人黄瀛』（重慶出版社、2010年）に収められている。
- (4) 前掲、劉著、「表3 黄瀛が陸軍士官学校在学中に発表した作品の細目（1927年10月—1929年7月）」、10～11頁。
- (5) 前掲、劉著、6頁によれば、料理屋の店名は「白十字」。
- (6) 前掲、佐藤竜一著（2016年5月）、56頁。
- (7) 前掲、劉著、4頁。
- (8) 中込純次「思い出の糸—文化学院と同人誌—」『愛と反逆—文化学院の五十年—』文化学院編纂室、1971年、194～198頁。
- (9) 前掲注(8)、中込著、197～198頁。
- (10) 前掲注(2)、吉岡著。
- (11) 聞一多作、黄瀛訳「彼の女を忘れた」2号（18～19頁）、劉半農作、黄瀛訳「擬兒歌其他その他—（用江陰方言）」3号（18～19頁）。なお、黄瀛による当時の中国詩壇の紹介として「中国詩壇小述」『詩と詩論』第4号（1929（昭和4）年6月）（前掲、佐藤竜一著（2016年5月）、211～214頁に所収）がある。
- (12) 創刊号には「文芸批評序説」（19頁）、「情熱の墓場」（29頁）。2号には「悪魔の寺院」（12頁）、「アンチプロレタリア芸術論」（15頁）。3号には「芸術価値其他」（7頁）。
- (13) 別府大学広報委員会編『別府大學通信』第26号（1984年10月15日）、1面。
- (14) 別府大学『学生生活2019年度』、3頁。
- (15) 表中1および8は、佐藤義詮先生を偲ぶ会編『佐藤義詮先生七回忌記念文集』（1993年3月28日）に所収。
- (16) 表中4に「それがきっかけになった」とある。
- (17) 代田昇遺稿・追悼集編集委員会編『読書運動とともに—子どもたちに読書のよろこびを—』（ポプラ社、2002年4月）、520頁。

- (18) 著者である今井航・山本晴樹・佐藤さくらの3名は、2019年9月20日（金）に法政大学九段校舎別館にある王敏研究室において王敏氏に約90分間のインタビュー調査を実施した。そのときの王敏氏の回答に基づく。
- (19) 前掲注(18)、王敏氏の回答。
- (20) 前掲注(18)、王敏氏の回答。
- (21) 前掲注(18)、王敏氏の回答。
- (22) 「清狂不阿」は「思うままに生き、束縛を受けない」という態度を示す成句と思われる。『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社、1993年）によると「清狂」には「癡顛（愚かである・ぼんやりしている）」のほかに「放逸不羈（思うままにふるまう）」という意味がある。「阿」は「おもねる・屈従する」であるから「己の本性に従ってふるまい、他者の拘束を受け付けけない」という意味になるかと思われる。
- (23) 前掲注(13)、1面に掲載されている写真。
- (24) 王敏著、鈴木昌訳「日本へ留学の意義—国境を越えた近代教育実践者の黄瀛母子—」別府大学紀要委員会編『別府大学紀要』第58号（別府大学会、2017年2月）、193頁。
- (25) 決定事項は「一、四川外語学院は、別府大学学長佐藤義詮の招きに応じて1985年10月に群一院長のほか3人の代表を派遣する。二、双方の大学は、お互いに研究出版物を交換する」であった。協議事項は「人事交流に関すること」「教育機器提供に関すること」の2点であった。同記事には1985年10月20日から25日の来学予定が示されている。しかし実現したかどうかは判らない。この来学予定は、おそらく延期となり翌年1986年3月に実現したと見られる。
- (26) 前掲注(18)、王敏氏の回答。
- (27) 表中7に掲載されている写真。
- (28) 前掲、佐藤竜一著（2016年5月）、154～155頁。
- (29) 王敏氏は「詩」と「文化学院」を通じた出会いに「芸術」を付け加えることを提案している。
- (30) 前掲注(18)、王敏氏の回答。
- (31) 今井航「大学の「2018年問題」の到来に応じるためのヒントを探る～別府大学の根～」『アルゴノート』（別府大学附属図書館報）No.52、2018年。

本稿は、令和元年度別府大学学長裁量経費支援事業の助成金による研究成果である。

『別府大學通信』は、別府大学附属図書館事務長の吉岡義信氏よりご提供いただいた。また、1986年3月6日付の写真や色紙は、佐藤允昭別府大学名誉教授よりご提供いただいた。

法政大学の王敏教授は、たいへんお忙しいなか、こころよくインタビュー調査に応じて下さった。

お三方に深く感謝の意を表したい。